

令和5年度第4回「知事と一緒に生き生きトーク」発言要旨

- 1 テーマ：地域ぐるみで子育て支援～子育てカレッジの取組を通して～
- 2 日時：令和5年11月16日（木） 13:00～14:10
- 3 場所：岡山県立大学「チュッピーひろば」（総社市窪木111）
- 4 参加者：備中子育てカレッジに携わっているスタッフ・学生など6名
- 5 知事挨拶
 - ・おかやま子育てカレッジの取組を通じて、今後、岡山における子育て支援がより良くなるためのアイデア等についてお聞きしたい。
- 6 発言内容等
 - 【自己紹介（子育てカレッジへの関わりなど）】
 - ・大学内の親子交流ひろば「にこたん」で学生ボランティアをしている。サークルでは子ども向けイベントにボランティアへの参加や、新見市で多世代交流のイベントの企画や運営をしている。また、子育て以外にも、ゼミ活動でボランティアとして災害支援活動や地域貢献活動をしている。
 - ・倉敷短期大学専攻科2年生で、倉敷市の公立園等で会計年度任用職員としても働いている。大学には、「くららっこ」という子育て支援拠点があり、そこにボランティアや授業の一環という形で入っている。学生主体で進めることも多くあり、来年1月にはスタッフの方と学生と親子の皆さんでお昼ご飯を食べるという活動を計画している。授業では、ひろばで行う活動の計画、振り返りをしながらスタッフの方と一緒に活動している。倉敷は他の学区にも子育て支援拠点があるので、他の拠点にも出張ひろばのスタッフの方と一緒にいたりしている。授業の中でも他の子育て支援拠点の見学や実習を通じ、そのひろばの利用者や利用方法の違い等を学んでいる。
 - ・「チュッピーひろば」をはじめ、総社市にある子育て支援ひろばを利用している。わが子は生後5か月の頃からこのひろばでお世話になっている。私は岡山県の出身ではなく、結婚を機に岡山に来た。岡山にあまり知り合いがいない状況だったが、ひろばにお世話になり、スタッフやそこで出会うお母さんと知り合いになったことで、本当に子育てがしやすくなった。もしひろばに出会っていなければ、小さく子育てしていたらと思う。
 - ・保育士を30年ほど務めた後、支援員として「にこたん」に勤めるようになり5年目になる。支援員になったばかりの時は、保育士との違いに戸惑い、苦しんだ時期もある。そういう時は一緒に働くスタッフ達に助けられながら、日々笑顔でお母さん達をお迎えすることを心掛け、毎日勤めている。
 - ・保育士として約6年間働いていたが、出産を機に辞め自宅で過ごしていた頃に、総社市で県内第1号の地域子育てつどいのひろば事業を始めるということで、「子育て応援っこ」の開設に関わった。そこから、今、合計3か所のひろばの運営に関わって活動している。

- ・ 県立大学そうじゃ子育てカレッジ実行委員会委員長を務めている。専門は子ども家庭福祉であり、学科では子育て支援や社会的養護関係を担当している。同カレッジには2009年の発足段階から関わっている。発足に向け、大学の機能を地域に開放して子育て支援を行うという時には、どうなるのかと、ドキドキわくわくしていた。県民局や市役所、大学、「子育て応援こっこ」と、まさに官民学協働で展開していくのを感じていた。忙しくなるのは嫌だという気持ちもあったが、いざ始まってみると良い事だらけだと感じている。研究や教育にも役立ち、大学が具体的に地域に貢献するということが目に見えて分かる。
- ・ 私たちの研究でも親御さんと一緒に協働しながら、地域子育て支援拠点のスタッフ養成プログラムを開発し、それを県の子ども未来課と実践したりしている。教育の場で子育て支援論として話している支援の原則が、そのままここで実践されているので、ここを活用することで、理論と実践が一致していることを学生に肌身で伝えることができる。学生はここで子育て支援の事をリアルに学べ、実習以外に子どもと関わるので、本当にいい事だらけだと思う。

【子育てカレッジの活動や取組へ関わっての感想】

- ・ 実習では、子どもとは関わるが、保護者と関わることがあまりないため、「にこたん」にボランティアとして入り、保護者の方から話を聞くことは、学びになり、就職後も活かせると感じている。保護者の方から、新見市は子どもの物を売っている店がなく、外に買いに出ないといけないうのが困るという話を聞いて、確かにそうだった。そういった意見を聞くことができたり、親御さん同士の交流もできたりするので、必要な場所だと思う。
- ・ 大学内の子育て支援拠点の「くららっこ」の中で保護者の方とお話する機会が多く、その時に、保護者の方から、年の近い私達学生が、子育てだけでなく趣味の話等を話す相手となるのはすごくいい点だという声をいただいた。
また、大学内だけでなく、倉敷健康福祉プラザの子育て支援拠点に行くことがあり、そこでは、まだ診断を受けていないが発達に遅れがある子ども達に向け、ふれあい遊びということを計画し、実践している。講義で習った内容を、保育の現場に保育士として出る前に、実際に実践して学べることは凄く魅力だと感じている。
- ・ 私は時間とお金があれば、何人でも産みたいと思うが、現実問題として、家族構成等を考えてみるとお金もかかってくるし、自分も働かないといけない。今は子どもが1歳位で保育園に入れ、両親は2人とも働くのが主流になっていると思う。子育ての事を本やネットで調べると、3歳までは親と濃密に話すのがいいと教えてくれるものもあるが、実際には、3歳まで家に居られる家族は今凄く少ないので、寂しく思っている。今育休を取っている立場なので、いつかは復帰して、子どもを預けて働かないといけない、その現実と戦わないといけないと思っているところだ。
- ・ 保育士と支援員で、大きい違いがあると思ったのは、保育士は、園でお母さん達と会話はあっても、奥深くまではあまりお互い探り合わず、お母さん達も子どものことを「今日どんな感じでしたか」「今日悪いことしませんでしたか」くらいのお話しかしないと思う。一方、支援員になって会う回数を重ねていくと「うちの旦那ね、こうな

んですよ」「おばあちゃんがこうなんですよ」といった話をされることもあり、家族内の構造や、奥深くの生活環境が少し見えてくることがある。保育所は子どもを中心に成長を見届ける場所だが、支援員は、お母さんが元気であってほしいと、保護者の方を支える部分が大きな違いかと思う。

- 保育士は「園でこう頑張っています。お家でもしてあげてください」という様に、お願いごとが多い。支援員になり、お母さんからの悩みに対し、すぐに「お母さん、こうして」と答えを出すのではなく、一緒に考え、みんなで声を出して、その中でお母さんに決断をしてもらい、お母さんが「自分で決めた」という自信につながる手助けとして、一緒に伴走していくのがいいという事を習った。

そういった点で保育士と支援者は違うと思う。一方で、保育士もやはり支援者でないといけな部分はあるので、学生さん達は今とてもいい学びをされていると感じている。

- 先ほど言われたように、子育て中のお母さん達の悩みは、保育士にはなかなか相談できない。先生に少し聞きたいが、時間がないから、先生忙しそうだから言えないという方が来てくれ、「実はこういう事で悩んでいる」と相談されることもある。支援員として、そういう時にいつもそこに居て、話を聞く存在でありたいと思う。
- 私もお金があれば何人でも産めると言っていたが、共稼ぎをしなくてはいけない社会全体の構造が、やはりおかしいのではないかと思っている。物価がどんどん上がっているが、賃金が上がらない、保育士の賃金も低いまま、なかなか手もなくなっている。そうした状況が改善し、お母さんがもっと子どもを産みやすく、子どもが3歳になるまで家にいれる社会になっていけばと思っている。一方で、子どもが早く保育園に行った方がいいお母さんもいるので、そこは難しいところだ。
- 私たちは今、中学校や高校で、赤ちゃん登校日ということで、ひろばに来ているお子さんを連れて中学生高校生と関わる事をしている。中高の時に小さい子と関わる経験があると、親になった時に凄く違うというデータが出ているようで、そういう機会を持てる社会にしたい。本当に、今お子さんと関わる事がなく、実際に子育て世帯がどのように子育てをしているのかが、見えづらくなってしまっているのもう少し開けて子育てができる環境があると、お互いにもっと楽になるのではないかと思う。
- 県大は色々な学部の方がいるので、そういう人達とも関われる。食堂に行ったら、小さいお子さんと食事した後にお母さんがトレイを片付けていたら、学生さんがずっと行って片付けてくれ、「片付けてくれた」と嬉しそうにお母さんから言ってくれたり、そういう助け合い精神が自然に生まれる環境も生まれていると思う。
- 情報が溢れていて、どれが正解かも分からない中、お母さん達は本当に一人で頑張らないといけなと一生懸命になっていて、難しい時代だと思う。
本来人間は群れて子育てをするもので、全て母親が抱え込んでするということはある得ない状態だったのに、少し前から日本社会では母親が3年間抱え込んで子育てをするのがいいことだし、そうするのが当たり前というのが徹底的に刷り込まれてきた。その結果、少子化だとか、母親がいつも辛いという状況になってきている。
- 私自身は育児休業を2回取り、子どもを1歳前後で預けて働いたが、結果的にうちの子は、私が一人で抱え込んで育てるよりも、保育園のおかげで立派に育ったと思って

いる。早いうちから保育園に預けることで、私自身も母親以外の顔を持てた。保育園に行けば、母親と同じくらい、むしろそれ以上に子どものことを親身になって気遣ってくれる保育士さんがいるのが良いと思う。そのためには、保育の質を上げること、親身になって伴走してくれる保育士や子育て支援拠点の支援員が必要だ。多様になりつつある女性の生き方をみんなで支えていくあり方が今は求められている。

また、そういう姿を次世代が見ることも大事だ。例えば、先程言われたように、大学に拠点があることで、学生達が、親子の姿を見る、こういう場所を利用しながら楽しく子育てをできるんだということを知るといことはモデルになると思う。

【子育て支援をより充実させるためのアイデアなど】

- ・保護者の方と保育士の方と子育て支援をされている方、その繋がりをもっと増やしていく事が大切だと感じた。その点で、例えば「にこたん」や「くららっこ」が大学内にあり、保育を学んでいる学生が繋がりに入ることは、より保育の質を上げる訓練にもなるし、今子育てしている方にとって心の支え、頼れる人が沢山できることにもなると思う。
- ・「くららっこ」に来られたお母さんの中に、倉敷に約2年おられて、別の県に移る方が最後に来られた時に、他の保護者の方からおさがりを頂いたり、支援員の方と涙ながらに話をしたりしていて、子育てをしているお母さんが約2年の関わりで信頼関係や繋がりがここまで出来る施設は少ないのだろうと思った。そういった場所が近くにあることが大事であり、学生はそれを見て、勉強することで保育の質等にもつながると思った。
- ・私は利用している立場だが、こうして色々な事を考えてくださる方が沢山いることは自分が母親になって初めて知った。先ほど話があった様に、1人で頑張らないといけない時代になっていることに気付いている方が沢山いて、「助けて」と言えば助けてくれるところが沢山あることを私は知れたので、凄いのびのびさせてもらっていると思う。「チュッピーひろば」をはじめ、ひろばで出会ったお母さん達と話すことで、私も息子も友達ができた。

次は、それを知らない人に対して、どうやって知らせるかが重要だと思う。

1歳児健診に行くと、出会ったことのない総社市のお母さん方が沢山居るが、日々どうやって育てているのだろう、ひろばあるよと教えてあげたいと思ったりする。

- ・先ほど言われたように、伝えていくというのは重要だ。私達も今、届けたい人に届けるためどうしたらいいか、日々ミーティングで話をしている。今まで「にこたん」はFacebookを活用していたが、学生さんからFacebook見ないと言われ、Instagramを始めた。すると「Instagramを見てきました」と言って津山から来てくれたり、やはり違うと感じている。
- ・また、先ほども言ったが、家で一人籠っている方等に対して届けようとする時には、やはり連携が重要だ。保健師の方はそういった情報をお持ちなので、保健師の方とも連携しながら、私達ができることをやっていく形を、今少しずつ深めながら、やっている。
- ・お父さんの育休が広まってきており、今育休中なんですと言って、パパだけが子ども

さんを連れて利用されることが、「にこたん」は割と多くある。

ただ、最初は大学にあるからこそ足が運びにくいという点はあると感じている。

- ・私達も外に出て、公民館や図書館でのひろば等を通じ、まず顔を覚えて頂くことから、少しずつ広めていきたいと思っている。

今は、企業等も回って広めているところで、色々アイデアを出しながら、お母さん達の孤立化を防ぎたい。

- ・先ほど言われたように、Instagram等の情報発信は、しっかりやらないといけないと思うが、最近は色々なアプリがどんどん出てきているので、それに付いて行かないといけない。若い人の意見をどんどん聞いて、何が流行っているか、何にヒットするか、子育て中の世代のお母さん達が何に気になって、興味があって、というところを、こちらが把握する力が凄く必要だと思う。

また、先ほど言われたように育休のお父さん達も沢山来てくれるが、中には、取るだけ育休で、「取ってもらっても困る」と言うお母さんもいらっしゃる。

「取ってやった」と言われたり、自分の時間ができるとゲームをしたり、育休中に「俺のお昼ご飯は？」と言うような、そういうお父さんもある程度の数はいると思う。私は、育児というのはずっと続いていくもので、1か月、2か月一緒にして何が分かるのかと思う。育休よりは、3歳までの親はみんな残業せず、4時、5時半には帰るという感じにすれば、仕事もでき、仕事の進捗具合も把握でき、いいのではないかなと思う。

- ・地域性等も色々あるとは思いますが、ここに来てくれるお父さんは頑張ってる育休等、子育てに参加されている。お父さんが、今凄くクローズアップされており、お父さんに求められるものがどんどん大きくなっている。仕事も頑張れ、子育てもちゃんとしろ、育休ちゃんと取れ、という中で、お父さんがへろへろになったり、そういう役割を担いたくない、逃げてしまうお父さんも一定割合出てくるだろうから、もう少し若い世代で、準備教育のようなことをした方がいいと思う。男女関係なく、子育て支援拠点の事や、困った時にどうしたら良いか、等について、基礎教育のような形でした方がいい。まだそうした教育が、実際の男性達の生き方を揺さぶるところにまでなっていないので、妊娠中からの子育て支援のような形で、妊娠中のお母さんとお父さんが参加できるプログラムに改革していくことも必要かなと思う。
- ・多様性尊重が今時代のキーワードになっているが、どんな生き方とか、どんな家族の形態であっても、子どももちゃんと育つ、親も子どもも幸せといえるようなあり方がいいと思う。

だからこそ保育学生にも、子育て支援拠点のスタッフにも、保育者養成教員にも、多様性尊重ということは教えておいてほしい。また、虐待の一次予防のためには保育教育や地域子育て支援拠点が手厚いことが必要で、どうしよう困ったという時に、即解決できるような相談先があることが重要だ。

さらに、お金に困るという状態にならないように、育児手当のような支援が手厚くあること、どこに行っても安心して預けられるような保育所、幼稚園、子育て支援拠点があること、そうしたことを通じて虐待そのものを起こさせないという一次予防のところがしっかり充実していることがこれからは大事なのではないかな。そのた

めにも現場の先生には頑張ってもらいたいと思う。

【知事まとめ】

- 子育てについては、誰かが辛い思いをすることなく、みんなで子育てできる環境を作っていきたい。
- 子育てしやすい地域を作るうえで、今日は色々とヒントをいただいたと思う。